

昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可  
昭和五十八年七月十五日 発行(毎月一回・十五日発行)

(通第四〇八号)

目 次

内 愚 外 賢	近 角 常 観	(1)
父 と 子	池 山 栄 吉	(5)
はからい心と大悲真実	井 上 善 右 五 門	(9)
慈 光 日 誌 抄	西 元 宗 助	(12)
一 道 会 の 記 (三)	榑 原 徳 草	(15)
と も し び	花 田 正 夫	(22)

慈

光

第三十五卷 第七号



## 内愚外賢

### 近角常観

たとひ牛盗人といはるとも、もしは善人、もしは後世者、もしは仏法者とみゆるやうに振舞ふべからず。

乙卯の歳、聖人八十三歳、御満悦のあまり、安静の御寿影を画かしめられしとき、一方には愚禿鈔を書きて、その御自督を傾けられた。実に愚禿鈔は聖人がその中心の自白にてまします。その思召は題号下の御悲歎にてうかがうことができる。

賢者の信を聞きて、愚禿の心を顛す。賢者の信は、内は賢にして外は愚なり。愚禿の心は内は愚にして外は賢なり。

とあるのがその御自督の御悲歎である。

特に深くいただき奉ることは、内は愚にして外は賢なり、と云い放たれたままであるところが実に深く感ずること

耻ずべし、傷むべしというは、我等が煩惱を見捨てたまわぬ御慈悲にかされて、煩惱の水解けて功德の水となる心持である。悪くはならぬと堅く結びて益々凍るのではない、氷より暖を出さんとりきむのではない、氷のまま、よいと寒風にさらすのではない、いかな堅き氷の中心までも飽くまで透りて下さる日光の力にて、自然と強剛難化の氷もとけて、恥ずべし傷むべしと融けてくるのが、よくもよくも我は内は愚にして外は賢なりという御悲歎である。

や、もすれば耻ずべし傷むべしというのは、是ではならぬと固くなることの様にも思われる。現に御一代聞書には蓮如上人の御弟子が「愛欲の広海に沈没し、名利の大山に迷惑し、定聚の数に入ることを喜ばず、真証の証に近づくことを快まず」とあるのを読み、往生すべきか、すまじきかと互に語りあいけるを、物越しにきこしめされて、蓮如上人立出でて申されるには、されば愛欲も名利も煩惱なり、されば機にあつかいをするは雑修なりと仰せられ候とある。往生すべきか、すまじきかというが雑修である。仏かねてしろしめして煩惱具足の凡夫と仰せられたることなれば、喜ぶべきことを喜ばず、いそぎ浄土へまいりたき心のなき煩惱具足の凡夫を特に憐みたまうのである。して見れ

ある。唯信鈔文意に於て、「内に虚仮を懐く」を釈したまふ文に、この世の人は無実のころのみにして浄土をねがふひとは、いつわり、へつらいのころのみなりときこえたり。世を捨つるも名のころ、利のころをさきとするゆえなり。しかれば善人にもあらず、賢人にもあらず、精進のころもなし。懈怠のころのみにして、うちはかなしく、いつわりへつろうころのみつねにして、まことのころなき身とするべしと云い放ちたまうままである。

かく云い放ちたるままにして、さらに善くすることの出来ぬが我等の有様である。而して善くせんと試みんとする心が起らぬのである。全くあやまりはつるより仕方がない。なぜなれば、どこくまでも見抜いて下されて御見捨てない御慈悲である。さればとて一点これよいというふうな心持はない。御慈歎の文に、耻ずべし傷むべき矣、と仰せられるのがこれである。

ば毫髪も機にあつかいなくして、耻ずべし傷むべしと慚愧懺悔の外はない。

浄土真宗に帰すれども、真実の心はありがたし、虚仮不実のわが身にて、清浄の心もさらになし、とあるが、実にこの内愚外賢と打出したる御懺悔である。しかし入信前には浄土真宗に帰したとあるに、清浄の心もさらになしでは矛盾じやないかと思うたことがあった。しかるに、いただきて見れば、我等が不真実不清浄であるを見捨てたまわぬが如来の清浄真実にてまします。如来は火なり、我等は炭なり、炭の心底までお慈悲の火が透りて下さるのである。されど私共自身は徹頭徹尾炭である。火が炭の心底まで透るところで火が燃える。お慈悲の火は我等が不実の心を憐みたまうなれば、御真実をただけいだけたくほど我身の不実を懺悔するの外はない。

気心を知った友人の前には、何事も打明けて語り合いて慚愧する如く、如来の前には心の底まで打明けて懺悔するが悲歎の御文の、耻ずべし、傷むべし矣と心を傾けての御自白である。歎異抄第九章も同じ思召である。悲歎述懐和讃も同意である。よしあしの文字をも知らぬ人はみな、まことのころなりけるを、善悪の字しりがおは、おおそら



ごとかたちなり、是非しらず邪正もわかぬこの身に、小慈小悲もなければ、名利に人師をこのむなり。この言い放ちたるお懺悔がありがたい。名利に人師をこのむなりと懺悔された、実に何とも云えぬ痛酷なる御懺悔である、我等は実に名利の奴である、愛欲の塊である。

とかく蓮如上人のお弟子が、往生すべきか、すまじきかと案ぜられたるが如く、とかく名利でもよいとか、名利は悪いとかになりやすいのである。名利でよいなら耻ずべし傷むべしでもあるまい。また信巻に引きたまうた涅槃経の御文に、名聞のためにせず、利養のためにせず、勝他のためにせずという御文があるべきでない。又聖人が法然上人の御前にて、人師戒師停止すべきよし誓言発願おわりきとあるを見れば、実に事実の上に於ては、たしかに名利をすてたまえること、実に内賢外愚にてまします。

かく云えば直に、それでは名利で悪いか、名利は止めぬばならぬかとなりやすいのである。勿論止められるものなれば止めるもよからう、石は落ちぬ様にしようとしても、落ちぬわけにはゆかぬ、浮ばうとすれど浮ぶことは出来ぬ、その落ちることを憐れみたまう如来の願力自然の御力なればこそ、重き石が軽々と打上げられるのである。されば毫

我等は徹頭徹尾、罪惡の塊である。

たとい牛盗人といわるとも、もしくは善人、もしくは後世者、もしくは仏法者とみゆるように振舞うべからずと聖人の仰せられたも、畢竟この内愚外賢の御慚愧よりあらわれたる御思召である。人より牛盗人と呼ばれるとままよ、もしくは後世者、善人、仏法者と標榜する程の価値あるものではない、との御自督より来たのである。勿論当時随分黒衣裳無衣を着し、高声に念仏して、仏法者めかした連中が諸国に横行したということが、歴史上にも見える所を見れば、其弊もありたなれど、本来吾等が左程価値あるものではない、むしろ人より牛盗人と呼ばれるとも我等に適した名前と申すべきである。

聖人が愚禿と名のりたまいたのが全く是である。卑謙であるとして事更に卑下したまいしことと思ふならば、大なる誤である。御本書に仰せらるる如く非僧非俗なりとて中心より破戒無慚の愚禿なりとの御自督の自然の表現である。聖人が、我は是教信沙弥の定なりと仰せられたは、この非僧非俗の意味である。教信沙弥と云えば直に貧賤生活とか労働者とかいう他の意味を雑え来りて、かえつて遁世、隠者、微賤ということと思ふならば誤である。教信沙弥とい

髪も機のあつかいはいらぬのである。舌機のあつかいをするの、石自身が上らんとし、炭自身が火を出さんと欲し、氷自らが融けんと欲する様なものである。そのあがらぬものを引上げるが願力である、その炭を火にするが慈悲の火である。氷の心まで飽くまで透るが如来の光明である。耻ずべし傷むべしと心底まで融けて仕舞うより外はない。

かく融かして頂くものの忽ち寒風に吹かれて本来の氷の性をあらわしてまた凍らんとし、炭火は火箸をもってつまみ出せば忽ちして見る／＼炭にならんとするのである。我等はお慈悲を喜んだあとから直にその炭の本性をあらわし、氷の本性をあらわすのである。我等は外に一應喜びがあらわれても本来が冷かなる凡愚なれば、とかく虚仮不実の本性をあらわし来るのである。此点では内愚外賢と仰せられたが実に我等が真相である。嗚呼、内愚外賢は我等の写真である。嗚呼愚なる我等なる哉、聖人は此御自督を傾けたまいたのが実に内愚外賢の御自白である。

外に賢善精進の相を現するを得ざれ、内に虚仮を懐けばなり、これ聖人の真面目である。浄土真宗の安心、及び化儀この一語に尽きたりといたたくべきである。世の中の尻のこころを捨てよかし、女牛の角はさもあらばあれ、嗚呼

うも聖徳太子の化儀も同様である。資生産業即実相という聖徳太子の御信仰は、あきないをもし、奉公をもせよ、獲漁をもせよというのと同様である。これでこそ却つて遁世でない。聖人の隠遁は山より市へ出られたる隠遁である。聖徳太子が、世間虚仮、唯仏是真と遺言せられたるが如く、煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、みなもてそらごと、たわごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわしますとの思召である。されば死後も、某閉眼せば加茂河にいて魚にあたうべし、と仰せられたのである。あたかも教信抄が遺言して、遺骸を鳥獸に与えたのと同じである。

最後に聖徳太子の乙卯から親鸞聖人の乙卯まで六百六十年、親鸞聖人の乙卯より本年（大正四年）まで六百六十年であるを思つて、うたた両聖を追慕し奉ること切なる次第である。

（求道 第十二卷 第一号）





## 父と子

わたしの隣家に、よう／＼誕生になって間もない赤ちゃんがある。若い御夫婦の間にできたはじめての女の子。

このごろ——といっても、ここ二月か三月かほど——どうかすると、ときたま或声、何か節のある歌のような声が断片的にきこえてくる。

低い声である。はじめはやや遠くかすかに、そしてそのまま遠のいて消えてしまうこともあるし、だん／＼高く、ゆっくりと近づいてくることもある。

メロディには聞きおぼえがある。その筈だ。家の前にさしかかるのを聞いていると、軍歌だ、此頃街のどこでも聞く、大人も子供も歌う日清日露戦争当時の軍歌なのだ。

しかし今きく声は大勢のではない、一人のだ。しかも子供ののではない、たしかに歴乎とした男の声だ。

さあわからない。なんば非常時の真最中、日支事変、戦まさにたけなわなりの秋とはいえ、大の男が昼日中、とな

寝就きのわるい子に対して、古今東西を通じて、恐らく人間の親子というものが存在してからのかた、普く認められ、用い慣れ来たものに子守唄がある。

となりの若い主人公は、今その手をやっているのだ。むずがり出した嬢ちゃんは、お父さんの懐で、軍歌に聞き入りながら、近くの櫟林のあたりまで来ると、大抵寝入ってしまうのだそう。

と知ってからは、例の歌声がひびいてくると、思わず微笑まずにはいられない。なんとも云えない和やかな心地。萬有のうちに鳴り渡る諧調そのものを見聞するような、フアウストならば、ましてしばしなんとおまえは美しい」と叫ぶであらうところの。

世に子守唄は数かぎりもなくあるが、しかしそれはただ子守唄としての定めを持つていただけで、子守唄必ずしも子守唄として用いられるとは限らない。本来子守唄でもないものが、子守唄として代用される場合も尠くない。こうした場合、歌の内容よりも、歌手の目的が決定をあたる。

今問題になっている場合も矢張りそうで、内容、規定の上からは、ただの軍歌であるが、目的、実践の上から云えば、立派な子守唄である。

## 池山 榮吉

り近処にきこえるほどの声で、軍歌を歌いながら、一人ぶら／＼表を歩くなんて？ 正気の沙汰ではあるまい。が、あたりはひっそりとして、石を投げる悪童の気配もなし、当人もいとも静かに通って行くらしいので、変だなとは思いつつ、わざ／＼外をうかがって歌の主を見極める労を取るでもなく、そのままに過ごしていた。がそのうち家族の語るところによって事情が判明した。

歌の主は隣家の若い御主人、いつもきままって嬢ちゃんを抱っこして。ああそうか、と云ったようなわけ。

總じて子供には、寝起きのわるいのと、寝就きのわるいのがあつたらしいが、嬢ちゃんは後者に属する方と見える。目がさめたときは、にこ／＼して御機嫌ななめならずだが、ねむたくなりかけるのを合図にむすかり出す。さあそうなると、どうだましてもすかしても、なか／＼御機嫌が取り結べない、全く手におえなくなる。

本来軍歌であるものを子守唄としてあつかう。そこにいくらか創作的意義が含まれている。一種の軍歌的子守唄、こうした意味でのお父さんの創作が子守唄として、聞く嬢ちゃんの耳にはいつてゆく。

歌と酒、酒と眠。こういった風に組合わすと、その間ある程度の関連が認められるが、歌と眠、この二つの間には本来直接の因果関係はない。だから守する人が、自分勝手な好きな歌をうたったからといって、子供はねむらない、またはねむれない。子供の眠をもようさせるには、本来の、若しくは代用された子供唄でなくてはならない。

しかし子守唄にもせよ、それを聞く子供はどうして眠れるのだろうか？

子供は——皆が皆そうとも限るまいが、概していうと——決して眠るということ望むものではない。目の開いているかぎり、何かしよう、積極的に心身を働かせようという望で一杯である。ねむたさにくつつきかかると、我慢して押しあけて、何かしようと気張るのが常である。

この傾向は、七つ八つから十前後のいたずら盛りの時分に殊に著しい。けだし子供に在っては、かなり大きくなるまで、寝たいという欲求は、身体にはあつても、意識にはのぼらないのである。



まして頑是(かたせ)ない幼児にあつては、眠りたいという欲求が直接意識にのぼるはずはない。従つて陰に睡眠の必要に迫られていても、陽に眠ろうという態度には出ない。ただ何か他の事をしようとあせる。眼耳鼻舌身意のいずれかを働かせようとするとあせる。ねむさにおさえられて、思うままにならない。そうした矛盾撞着がすなわちむずかりの因になる。

だから守をする人が、子供の陽の注文に応じて菓子をやつたり、玩具を持たせたり、人形を抱かせたり、絵本を見せたり、望むがままに手に手を尽してなだめようとしても全く駄目。子供は意識しない不可抗的なねむさに支配されているのだから。

そこを見抜いて、子供の眠りをさそう手段を講ずるのが、子を守りする人の思いやりである。そしてその唯一恰好の手段として選ばれたのが子守唄である。

子守唄は、どうして子供を眠りに引入れるのだろう。

それは、唄に心を集中させるから

どうして集中させるのだろう

なぜかよくはわからないが(一寸心理学でも調べて見たいような気もするが、手許に材料がないからまあそれにも及ぶまいとして置く)一つは歌の文句や、節にもよろうし、

わたしは先ず、信ずる人が仏に抱かれる姿を見る

子供姿のイエス・キリストを抱く聖母マリア。ラファエルの名画に見とれる感がする。

一つ一つのものが互に織り交つて全体を形作り

一つのものが他のものうちに生きて動く

なんたる美観であろう！しかしただ美観(ファースト)であるだけに止まるであろうか。

親鸞におきてはただ念仏して

親鸞一人がためなりけり

かくのごときの我等がためなりけり

こうした言葉を聞いても、一応感心もするし、憧憬もするが、おなじ思いを我みずからに実感することのできない人、乃至、しようとしなない人、これらの人々は、いつまでたっても、ただ傍でみる人であるに過ぎない。信仰の事実、情懷に接しても、いつも自分を第三者の地位に置いて、単なる観賞の態度以上に出ない人、こうした人が余りにも多きに過ぎるのは遺憾に堪えない。

莞爾として心象を眺めていた私は、やがて、なんだかたましいがからだから離れて行くような微妙な感じに驚かされて、更に一段と目を見張って心象を見直すと、何ぞはからん、自分自からその中に見出したのであった。

一つには歌手の心のこもる声にほだされて、じつと耳を澄ますからであろう。が、また一つには、聞いている間に、何とはなしに、今きく声が他の何ものにもまして、しっくり心に叶い、時にはそうした自覚さえも伴うからであろう。こうして唄に聞き入るうち、他面に余の雑念が遠のいて唄に一心するからであろう。

歌に聞き入るのは暗に歌うのである。よく聞く者は、歌手と合唱、もしくは輪唱するのである。歌を伝つて、歌手の心が聴者の心に通じるのである。聴者が歌手の心を受入れるのである。

こうして眠りが招来される。

眠りは子供の心の奥にひそむ欲求である。歌はその欲求の意識しない欲求である。その欲求をみたしてやろうがため、心をこめた子供への賜物が子守唄で、それに引かれてただほればれと合唱輪唱するのがよく聞くものの態度である。こうして事実のうちに織りこまれた子守唄は、概念的な、単なる見本として陳列されたそれではない、活用された、謂はば「生ける子守唄」である。

今私達の眼に浮ぶ「生ける子守唄」の父と子。わたしはこの心象に見入ってそくばくの教えを聞く。

その赤ちゃんが私なのだ。私は子守唄を聞いている。わたしの子守唄は念仏だ。歌手は云うまでもなく仏、一心正念直来と呼びかけてまう仏なのだ。

子守唄の父と子について云えることは、類推的に仏と人についても言える、従つて経論、聖教の多くは、子守唄の父と子のどこかに納まるといつてもいい位、子守唄に結ばれた父と子の心象は、広く且つ深いものである。

悪戯にほうけて、ねむたさを意識もしないでいる子供に、本当の安らかさを与えようと、意識下の欲求を見通して、それを喚びさますてだてとして子守唄を工夫し、倦まず撓まず歌いきかす真心がとどいて、耳を澄ます子の心に、何よりも勝る歌の善さが泌々と感じられて、遂には考を合わせようと思ひ立たせる。

それと類似の展開が仏と人と念仏とに認められる。

かくて人生究極の欲求が充たされ、人生最高の理想が現前する。  
『聖鸞』第三十六号より



# はからい心と大悲真実

井 上 善 右 工 門

親鸞聖人がよく用いられた言葉に「義なきを義とす」という仰せがあります。これは師法然上人の常の仰せでもあったのでしよう。聖人の末灯抄には幾度も出てきますし、その他、御消息集、三経往生文類、尊号真像銘文、和讃、自然法爾章にもみえています。また歎異抄第十章に「念仏は無義をもて義とす、不可称、不可説、不可思議の故に」というのは、私どもの常に親しんでいるところです。しかし「義なきを義とす」というのは、一見解りにくい言葉でもあります。

これを古人（石泉師）が解釈しているのに、初めの義は「人の構畫なり」後の義は「如来の作為なり」と言っていますが、なか／＼要をえた言葉だと思えます。先ず「構畫」という言葉が私の胸をうちました。

構とは、組立て作るという意味ですから、構畫とは構え作って画くという意となりましょう。これが人間の心のわざをよく表わしていると思うのです。私の心は何事によら

たします。

ゲーテが『ファウスト』の「天上の序曲」で「人間は努力するかぎり迷うものだ」と言っている有名な言葉がありますが、ここにも人間のはからいというものの本質を語り示している趣きが看取されます。また同じく「書斎」の場では、「人間は馬鹿気た世界に住みながら、それを全体だと思ひ込んでゐるのだ」と悪魔のメフィストフェレスに語らせている場面がありますが、たしかに人間というものは、小さな世界に住みながらそれを全体だと思つて閉じこもり、果敢ない思いに、ああか、こうかとはからいに明け暮れて生きてゐるのが、偽らぬ人間の姿であります。

そのはからいが、如来より私への大きなお催しを障え、真実な「如来の作為」を遮蔽してゐるのです。閉ざれているからはからいが止まぬ。はからいが止まぬから疑念が尽きません。

神戸に稲垣瑞劔という先生がおられました。先年九十六才で往生の素懐を遂げられましたが、稀な学徳兼備の念仏者でした。私もいろ／＼とお育てを受けたのです。晩年の先生は信の要諦を如何に言い表わそうかと、いつも念頭に案じておられたようです。さまざまに浮ぶ信心の妙句を、達筆で揮毫されましたが、その中の一つに面白い言葉があります。それは「大風に雨戸が外れるまでのことよ、この

ず構えている、そしてそれが自身に心労をもたらしているのです。例えば皆さんの前でお話するとき、無意識の奥に「よい話であつたと喜んでもらいたい」という構え心がひそんでいる。それに操られているから気疲れを感じるのです。もつと自然にありのままを語るなら、気も楽でしょうが、それを頑固にはばんでいるものが私の心の中にある。心は自由に使えるものを不自由に使っている。構畫という文字をじつと眺めて先ずそんな事を感じました。

この構畫が世事にとどまらず、習性となつて、人間の手の及ばないわが往生の大事にまでかわろうとするのは、はからい心というものでしょう。そのはからい心が、真如一実の真実が阿弥陀仏の招喚のみ声となつて、この私に喚びかけておられる大悲の真実心を、さえぎり障えて戸をとぎしているのです。ああか、こうかと如来の本願に理屈をつけて理解しようとする。しかし人間の組立てたものは、決して末徹るものではありません。必ずいつかは動揺を来

ままで」というのです。

はからいのやまぬ人間の心は、まことの人間の業であります。ところが人生には、思いもよらぬ大風が吹いて、今まではからいで生きてきた生活が、最早やはからいでは何ともならぬ窮地に落ちこむことが起ります。そうしたとき、その風に乗つて如来のさらに強い大風が同時に吹きよせる。そしてはからいの雨戸をたてこめていたその雨戸が、とうとう吹き飛ばされて外れてしまつた。その途端に如来の涼風が部屋に満ち／＼した。別にこちらからどうしたのでもない。雨戸が外れただけである。部屋の内はそのままであるが、雨戸を立てきつていた闇が晴れて、徳風が吹き流れるようになった。……こんな趣きを歎じられた言葉ではないかと味うと、私にはこの句が愉快であり、うれしくもあり、有難くもあつて、口ずさんでは味うてゐるのです。

「邪見憍慢悪衆生、信樂受持すること甚だ以て難し、難中の難これに過ぎたるはなし」

まことに久遠の業にまつわられて、よしなきはからいの止まぬわが心は、この偈頌に述べられている通りであります。然るに業の風と如来の風とが一つになって、この邪見憍慢悪衆生の雨戸を吹き飛ばして下さつた。何という有難いことでしょう。如来から送り込まれる真実心の風に浴びてみると、最早や、信じるとか信じないとかいう言葉その



ものが無用になってしまふようです。「義なきを義とす」というのもこうしたところであらうと思います。「信心獲得」という言葉にこだわるべきではありません。獲得しようとするのが、はからの努力です。そのはからいを取り除こうとすることも、色をもって色を消そうとするに等しいことです。慈雲尊者の軸を見たことがあります。それには「何事もなきぞ」と大書されていました。ただあるのは本願の真実が輝いているのみであります。

法然上人のお弟子随蓮が上人の滅後、他の弟子の言葉から、念仏の信に惑いを生じていたとき、夢で上人にお会いした。上人は庭の池に美しく咲いた蓮の花を指して、随蓮よ、人あってあれは蓮でない、梅である桜であると云つたら、そなたは何と言うぞと問われる。随蓮が蓮は蓮でございませぬものを、梅である、桜であると言われても、迷いようもありません、とお答えすると、上人が「念仏の義もまたかくの如し」と云われて、ハッと感じた途端に夢がさめたと話したが、竟如上人の『拾遺古徳伝』に記されています。ただほれごとく如来の大悲真実を仰ぐのみであります。

(昭五八年 六月七日)

### 一蓮院師語録

一、人生は浄土まいるの道中なり

膳橋云く。弥陀の浄土へは死してから往くにあらず。信の一念にはや発足して、やがて死ぬ時、行きつくなり。

二、水は湯になつても、水の時と同じく濕性を失わぬなり

問云。機の信心は信後に通ずるや。答云、生涯に通ずるは先輩以来の正義とみえたり。

「叢林集五、云く。西岸上の得脱までは貪瞋の常におこるなり。されば蓮台の上までは無有出離の縁の凡夫なるべし。此土入聖していたる浄土にはあらざるなり。されば二種信心は一もやむことあるべからず。

## 慈光日誌抄

——命(いのち)なりけり——

すこししらがの混じりはじめた家内に、用のあるときは「母ちゃん」と呼ぶ。ところで、この呼びかけの声のひびきのなかに、いつごろからか、いまはお浄土の母へのよび声の、不思議にも、まじっていることに気づいて、われながら驚く。

そういえば家内も、わたしに對して、「おじいちゃん」とか、「お父ちゃん」といいながら、ときには今は亡き、自分の祖父や父を、無意識のうちにも、想い浮かべているようである。その証拠に、そのときは、ほんとうに、やさしい声をだす。じじつ、家内の父は実におだやかな、慈しみ深いひとであった。

それはともかく、家内は、わたしに對し、「おじいちゃん」とか、「お父ちゃん」といいながら、じつさいは、いよいよ、たよりない息子をもつた母親のような態度になつてきた。わたしが外出するとなると、口やかましく服装の

### 西元宗助

こと、それから「自動車に気をつけて」から始まって、財布のことにおよび、勿体ないが、まことに口うるさくなつた。

思えば夫婦というもの、まことに不可思議なご縁であります。それに年をとると、殊に七十台ともなりますと、いよいよ不思議なもの、妙なものでございます。まことに「振り返れば」、榎本栄一さん仰せのように、「えんえんと幾山河、いまはただ、かたじけなく」でございます。

○ 私ども夫婦の、名実ともにお仲人でありなさる川畑愛義医学博士(京都大学名誉教授)の生活医学研究所発行(京都市中京区壬生賀陽御所町・賀陽コーポラス内)の『健康な子ども』四月号に、評論家・草柳大蔵氏との対談が掲載され、「満足」と「満腹」との相違のことが論じられている。一読して、さすがと感心すると同時に、教えられるところが多か



った。

その所論を私流に解釈して紹介すると、現代日本の危機の様相は、大人も子どもも、物にめぐまれて満腹はしているが、一だから肥満児が多い―しかし、心は却って不平不満が多く、決して満足していないことである。すなわち、精神的に満足していないから、―その責め的一端は宗教界にもある―不平と反抗ばかりで、決して生き生かされていることへの感謝の気持ちがない。ことに食べものに満腹してハングリー（飢え）を知らず、甘やかされているために、始末がわるいと。

なるほどと、肯く。なお、右の雑誌、宗教的仏教的色彩が内面に充ちている。幼児から中学生までのお子さんをお持ちの読者の方々に推挙したい月刊誌であります。

○ 毎年のことながら、さつき咲く五月には、種々の行事や会合があり、まことに新古今集の「年たけてまたこゆべし」と思ひきや命なりけりさ夜の中山」のように、命（いのち）なりけり、の感深く、いろんな方々とお目にかかることが出来ました。

○ 五月十五日の葵祭りの日には、富山の長谷顕性兄（光岸寺住職）夫妻その他を迎えて、羽溪四明（京女大学長）、森本教明（光徳寺住職）、川畑愛義（前出）の諸兄夫妻らと共に、

旧知四明寮関係の師友の法要と懇親会が催されました。五十年余の親しい友、殊に同じ釜の飯をいただいた仲間、そしてみんな妻君をつれての懇親、うれしい極みでありました。

○ 次いで二十二日の日曜は、足利浄円先生の二十四回忌。山ノ内の今田邸にて、おん年九十の桐溪順忍和上はじめ、故金子大栄師未亡人、井上善右エ門、中井玄英の諸兄らと身内の方々。（瓜生津和上、石田充之、花岡大学の両兄は支障欠席。この一年に一回の集い―ご法要も亦感慨深く、南無くくと、心底に念仏の湧き溢れるものがありました。

○ さらに二十六日（木）は、さる四月二日、宝寿九十九でご命終の「藤秀環師を偲ぶ会」が、広島市の日本生命ビル九階の大ホールで開催され、参加するもの約三百名余。昨秋、完結した藤先生選集八巻の刊行会々長の佐藤秀雄氏の挨拶などがあり、わたしも「芬陀利華」（ふんだりけ）と題して、追慕の感話をさせていただく。なお、この正月、先生からいただいた最後の賀状に書き添えてあった、おん歌を二つ、左に掲げる。

○ すくやかにおん年むかへたまひけむ遙かの庵に手をあはせつつ  
○ 祖母の膝にて念仏せしものが白寿に近きわれとなりける

○ ○ 最後は、五月二十九日（日）の岡崎市の杉浦豊さん宅での岡崎一道会。京都・洛西の浄住寺の榊原徳草老師夫妻のお伴をして私ども夫妻も参拝。これで十二年目である。徳草師（八十三歳）は「弱肉強食と草木国土」と題して、願力自然のお念仏の世界をお話くださり、わたしは「池山榮吉先生を仰ぐ」と題して、先生の「よきひとの仰せにききてみ名をよべば、喚ばはせ給ふみ声きこえぬ」という、まことにありがたいお歌を中心に、さいきんの私の領解（りょうげ）を述べさせていただく。会するもの数十名余。盛会でありましたが、あとで家妻、つぶやく、やはり花田田先生のお姿が見えないと淋しいと。

○ ○ なお、杉浦さん（榊原老師令室の舎弟）は、この早春、ご令息の十三回忌にさいし、お隣りの徳正寺（本派住職・佐々木淳正師）の丘に、ご令息の死後、十年がかりで自ら建立し完成された三重ノ塔を寄進された。このように杉浦さんは、もと／＼寺院建築の棟梁、それが令息の死を転機として陶芸家になられ、このたびは素晴らしいというより神々しい花瓶をいただく。

○ ○ 杉浦さん夫妻と私どものご縁は、思えば切ない。相ついで、同じように息子を、突如として死なせたものでございます。罪業深重、底知れない、はてしない、深い、深い、

かなしみが、ご縁でございます。このかなしみは、この動哭は、如来の大悲のほかには、なんともならないことを、年を経ると共に、いよく切なく、知らされております。南無阿弥陀仏。

## 盆会 の 歌

渋谷 俊

家ごと ともす 燈籠の ほかげにのりの道したひ  
のこれる ゆける 諸共に あひまふ けふの祭かな

流れし 時は かへらねど おひます苦の下深く  
まごころかよひ としどしに 面影さそふ祭かな

かたみにたのみ たのまれつ過ぐし日月呼びかへし  
香花のまへに よりつどふ 思出多き まつりかな





# 一道会の記(三)

榊原徳草

西元先生の御法話を終つて、緊張を和らげるために、例年のように御供物のお饅重をおさげして、一同お茶を頂き彼方此方で一服のささやきが聞こえて参りました。

次に山田宰先生の御話を承りました。その大要は次のようであります。

只今榊原先生から御紹介の岡山の山田でございます。私は池山先生の、大変勝手な言い方を致しますと孫弟子になるような気持であります。花田先生に長くお育て頂きまして、榊原先生とも既に三十年を越える御交誼を頂いております。この年に一度の一道会の御縁には、池山先生の御言葉をお借りすれば、阿弥陀湯という御風呂に入った湯浴みの気持、そういうお念仏の会にはべらせて頂く、これを樂しみにいつもこの会に参加させて頂いて居る者でございます。私といたしましてはお話を承り、特に榊原先生の歎異抄をお読みになる、あれをお聞きするだけでもここに來た甲斐(声をつまらせて一時止む)があるというようなわけ

い、そういう全体をさ取つて下さる、そういうものをいつも感じて居るわけでございます。丁度我々が太陽の光を見ることができなくても太陽は輝いてると云う言葉がございますが、そういう確信だけは毎日頂いておるといふような毎日でございます。我々にお念仏の世界がございますと、我は悪い人間、ひどい人間だと申ししても、あなたをよく反省しているとか、お念仏の世界に居るといふようなことが、お互に通じるわけですが、一方真宗から離れた世界でございますと、何だお前は自分でも悪いと思つているのかと、そう突込んで参りますと、自分は正しいのだと云つてゆかないとやつて行けません。早い話が政治の世界を見ましても、或は世界の動きを見ましても、米國が軍備をやるからソ連もやらねばならない。米國はソ連が軍事力を高めるから自分等も高めねばならない。日本もそれに同調しなければとなり、人類が繰り返してきた此の罪深い生き方をそのまま進んで行く。こういう世界の心、これは皆おれがくの世界でございます。

先程、自分は反省しているとか、悪人であるとか云いまして、その言葉の裏にはおれがくがあるのであります。そういう国際社会でも、毎日の我々の生活においても、自分が正しくお前が悪い、これは云つてみますと、いつも自分は正しいという生活をしているしかあり得ない姿と

でございます。

私としましてはお話する資格は何も無い、そのようなこととで今日はここへ出させて頂きました。よく考えてみますと、自分は話をする柄ではありません。ここで自分はこのようなことを頂いて居ると話をする、またたわごとでありまして、どちらがどうということは無いのであります。そういう、どの道をとりますが、自分の事しか考えられない、そういう姿、そういう中に、そこを御理解下さつてお見捨てない御慈悲。まあそこを生活させて頂いておるわけでございます。毎日の生活の中にこのお念仏を頂いております。

私は自然科学の方面の仕事をして居りまして、お念仏を有難くというような時間はないわけで、学生を相手にして居り、大学で先生をして居りますが、その中でお念仏は本当は用はない毎日でございます。然しそういう自分の中に何かその全体を包んで、お前はそういう姿でしかあり得な

いもの、そういうことに気づかせて貰うと、相手がそう云つても、それは自分の姿そのままであるという気持をもつて見えますし、そういう中に「念仏者は無碍の一道そのものなり」の御心が切実に感じられる、そういう所があるのでないかと思われのでございます。然もこれは近角常観先生はじめ多くの先生方が言われますように、日常の煩悶、悩みを解決せんために信仰を求め、信仰は煩悶解決の手段である、という聞き方をしては、これは本末顛倒でございます。そういう目的のための信仰というのでなくて、仏の大慈悲に抱かれて自然にその日々の面が出てくるのではないか、というわけでございます。

私のような自然科学をやつて居る者にとりまして、現代社会は大変心配な面がございます。昔には考えられないような便利さが日常生活の中にはいつて来ております。十九世紀に入つてからの科学の發達は非常なものでありまして、例えば東京大阪は新幹線で三時間で來られます。昔の人にとっては考えられない便利さであります。外国へも一昼夜で何所へでも行けます。便利さから云うとコンピュータが出來まして、そういうものが日々増して参りました。例えばこういう話をしましても、それが直ちにタイプされて出てくるような機械も間近になつてきました。人間のやることが少なくなつてくるわけであり、科学が我々



の願望を満たしてくれることは結構なことでございますし、又病氣しましても、あの癌に多くの人々が苦しんで居られます。これを何とか克服しよう、これも我々科学者のつとめでございます。現在、癌で死の宣告を受けている人も、もう少ししたら死なない時代になってくる、これも間近いのではないかと思えることです。そうしますと池山先生の奥様が胃癌で死の宣告をうけられ、それを縁として念仏を喜ばれた、そういう事も無くなりましょう。然しそういうようなことになりましても、果して人間それ自身が幸福な道を辿っているか。これは疑わしいではないかと思われます。矢張りその中で、いつ迄も人間としての業と云いませうか、おれがくを通過してゆく姿、これが気の毒でならぬという仏様の大慈悲、そういうものに気付かせて頂く。そう云うものの中に、といつても便利な社会になれば、その中に従って行く。或は電話を利用しないわけにはいかない、そういうものを追求し、自分のことしか考えられない、そういうことに気付かせて頂く、それしかないではないか、そういう中に自然と何か無碍の道が歩けるのではないか、そういう風に思われてくるのでございます。

自分が念頭にあることを申し上げました。私自身が本当に承る立場で参会しましたので、申しわけのない話をいたしました。どうも有難うございました。

せん。どういう転び方をしたのか判りませんが、どうも世の中にはこんなことがございますね。自分の不注意ということと何か人間の計らいを越えた事が向うから起ってくる、という二つのことが重なっておるようなこと、そういうような思いが深く致しまして、それから毛沢東の言葉ですが「水に落ちた者は落ちるたびに賢くなつてはいあがる」と、そう思いますと失敗というものも又有難いものだな、という感が致しまして、あれを思い、これを思い、後から考えますと不細工な話ですけれども、気付かせて頂いた、そういう思いを持ちながら今日この会へ伺いました。

一つのお話を申し上げます。広島のある農村の青年会から招かれて御話に参りました。話が終りまして、あとの座談会で一人の青年が申しますのに、今まで種々な方から色々なよい話を聞きましたが、私の心は結局満たされません。お話には感心しますが、それは言葉の表現の巧みに感心するだけであつて、結局私の胸のうつろなものがそのまま残つて居ります。ああも云い得るし、こうも感じるというだけで、すべて私にとって影法師のような気がします。そういうことで、元来お酒が好きなので段々お酒を飲み、ホロツと酔つた時に、すべての事を忘れて心が明るいのですと、申しますのですね。

で私のようなお酒を飲まない者にとつて、それは結構で

以上で山田先生の御法味は終わりました。次に井上善右エ門先生のお話は次のようでありました。

今日は大変不細工な顔をして参りました。実は道で転びました。それで私つくづく知らされた事がございます。「御一代聞書」の中に「行き先き向うばかり見て、足もとを見ずば、ふみかぶるなり。人の上ばかり見て、我身のことをたしなまずば一大事なり」と仰せられ候」とあります。

私今迄この話を知りましてから、どれ程長くたつたか判りません。所が私が転びました時の状況を振り返つてみますと、少しゆるい傾斜になつて居る道を下駄をはいて歩いていましたら、アスファルトに割目がございます、そこに下駄がひっかかったようで、それで見事にピタツと転げまして、そこを人が通つていました笑うていたであらうと思ひました。それでつくづく思ひ知らしめられましたのは、頭で知つて居ても、私の身体は知つていませんでした。それで「向うばかり見て足もとを見ずば踏みかぶるなり」と仰言つておられるのに、足もとは全く見て居りませんでした。頭で知つた覚えたということ、身体で知るということと、全く違ふということをつくづく知らされたこととでございます。で御覧のような怪我なんですけれども、眼鏡は少しも毀しておらんのです。こんな所をすりむいたので、眼鏡もどうにかなりそうなのに何ともなつて居りま

すなあ、けれどお酒は醒めましよう、すると淋しくありませんか、と申しますと、青年は相槌を打つように、そうです、と云い、醒めた時が淋しいのです、然し淋しいけれど、ここに生きて居るといふ、何か自分が生きて居る証が感じられるような気がしますと、まあ青年がそう申したんです。私にはその時の言葉が印象に強く残つて居ります。

それから幾月もその青年が今どうして居るであろうと、思い出しますが、その青年の態度に虚無というものがにじり寄つて居る、そういう姿が見取られるように感じました。特にその青年が、ああも思ひこも感じるだけで、結局は自分にとつて影法師でしかないという言葉が、私の胸を突く感じが致しました。確かにそう云う時が人間にはあるんじゃないでしょうか。そう云うところからして私の今在る所はどういうものであろうかという反省をせしめられました。その青年を見て居りますと、自分というもののいつわらぬ底に突き当たつたと申しましうか、そういう感じがしたのでございます。矢張り私共の持つて居ります感情とか思想とか意志とか、そういうあらゆるものの影法師が徹底して払い尽せるという時が私共に取つては本当の自分というものに出会わす時でなからうか。

池山先生が、唯念仏して、といふお言葉に出会われた時のお話、それから多田先生が、解つても落着けないし、解



らなくても落着けない、右へやっても左へやっても落着けない、どうとも仕方が無くなってしまつて、自分は狂気になるのでないかと思つた。そうこうしているうちに又世事に紛れていた或朝のこと、同じ思いに胸塞がり乍ら御膳のお箸を取り上げた途端に、私でもお念仏することが出来る、不図、胸にその思いが新しい光となつて蘇つた、と申して居られますね。その時に御飯を食べるのを忘れて、念仏をとめどなくし乍ら、家の中を歩き廻つたという手記がございます。私は矢張り池山先生が、唯念仏して、という所に御出会いになりました時も、多田先生の今申したような、私にもお念仏することが出来るんだ、とそういう時はただ言葉だけではなしに、先生の人間としての底に突き当つて居られた、その時にそのような出来事が私共の上に向うから現れて下さつたのではなからうか。でその青年のことを考えましても、お話を聞いても一場の感激に終つてしまつて心の中はうつろであるといふことは、そのうつろな状態に停つて居ることが出来ないといふものが、その青年にはあつたと思われまふ。

先程西元先生から、仏様から拜まれてといふお言葉がございましたが、私共が停つて居れない何かうつろなものに突き当たるのは、矢張り私に対する虚偽を虚偽であると拜んで下さる、そういう光に催されて居るためになからうかと思ひ

虚構の心の影といふものは、それで腰を掛けようと致しますけれども、それが虚構のものである限りは決してそこに腰掛けおさせるものではなく、いつか虚構の偽りが曝露されてくるものではないであらうか。そういう時に親鸞聖人の「よろずのことみなもて、そらごとたわごと、まことあることなきに、唯念仏のみぞまことにておわします」と仰せられた、これは人間の思いと思ふ、思いといふ虚構性が未徹つて、聖人の心の中に、それ自らを壊していつた、その時のお言葉であらうと思われまふ。

西洋にも種々な思想家が生まれて、虚無といふ、此頃の言葉で申しますと実存的と申しますか、自己に突き当たることを知らしめてくれた人々が多いのですが、やはりそれはどうしても一度はそうならざるを得ない必然性を人間は持っているのではないでしょう。その虚構のものがぬぐわれぬ限りは、結局は落着かないもの、心もとなひもの、そういうものが心の何処かに忍び寄る、これが私共へ真実への道を否応なしに指し示してくる、歩みを運ばせてくれる原動力になると申してよいかと思ひますし、それが先程申しました、仏様に拜まれてゐる、という、そういう真只中にこの私が居る証拠でなからうかと思ひるのでございます。私のような自分を突き詰るよふなことの出来ない人間は、今までぶらり／＼して居つた時が、どれ程あつたか知りま

ます。木の葉が水に流れている時は、水は流れて居るといふ感じではありませんでしよう。けれど木の葉を流れを留める力が加わると、その木の葉には水の流れという抵抗を感じるでしょう。それと同じく私共が虚無におそれ乍ら、それに停つて居られないといふこと、そこに私共はより大きな真実に照されている、拜まれてゐる、そういう感じが私にしますのです。そういう虚無といふものが何か一種の固定した虚構の影になつてしまひますと、虚無主義と一つの思想形態が出てくるのだらうと思ひますが、私共にならう虚無といふことが一応大切なことでありますが、それを一つの虚無の影として固定化するのでない、又その虚無といふ状態に留まらうと思つても出来るものでもない、そういうのは矢張り如何でしょうか、私共の偽らぬ心の底の状態であると申してよいのではないかと思ひます。今もその青年が、お酒を飲んで、自分の虚無感のわびしさを晴らすと致すわけでございます。けれどそれが真実のうさばら、しでない証拠に、酒が醒める時にもう一層淋しい、然しその時に、本当の自分に出会つたよふな気がすると申しました。そのことは私共仏法の真実を聞かせて貰ひます者にとつて、非常に貴重な言葉だといふ感じを受けまして、非常によい告白を聞かせて貰つて帰つてきましたことがございます。

せんが、然し私のような者も拜まれて居りまして、そして何時とはなしに、とう／＼御真実といふ動かしてみようもない仏様に出会わせて頂いた。そういう感じが私に致すのでございます。池山先生の廻心の御体験とか、多田先生の動転の御経験といふよふな深刻なものは私にはございませぬ。けれどもわれしらすその一条の道を仏様に拜まれて歩ましめられて参つたのでなからうかと、こう云う感じが致しまして、考えて見ますと有難いことでございます。まあそんな思いを申させて頂きました。有難うございました。ナムアマミダブツ、ナムアマミダブツ。

以上で池山先生四十五回追憶会は終ることになりました。それから例年のように精進料理の手料理で食事となり、約三十名程が食事を共にしながら夕方まで法雨に浴し、阿弥陀湯に温められました。

宿泊者は三名程でありました。翌日は十時頃から長崎の平岡様御夫妻と五六人の人々で昨日の法浴のさめやらぬ温さを共に語り合ひ、昔日のこと昨日のこと、現在のことなど語り合ひつつ昨日の残菜で食事をしました。

一期一会といふ厳しい言葉を自他共に胸に抱きつつ、解散したのであります。南無阿弥陀仏

(昭和五十八年一月七日誌す)



## おわび

編集者記

三回目の一道会の記がおくれましたことをおわびいたします。これは榊原様からすでにいただいておりますのに、折り悪しく私と家内が名大病院に入院せねばならなくなり、テンヤワンの状態でありましたので、延び／＼になっていました。お待ち下さった方々にまことに申しわけのないことをいたしました。

## お知らせ

全上

また本月は木村無相さんから念仏詩抄がいただけませず、中断させていただきます。これは木村さんが胆ノウ炎で武生市の林病院に入院されて、詩感が出ず、色々な支障がありましたためであります。幸に五月末に八十日の入院生活から一応退院して、和上苑から通院される由であります。宿痾の心臓病に今回の病が併発、眼も不自由な由であります。極く最近のおたよりに、(六月七日)

「いつも／＼目の愚痴を書きますが、私としてはこれが大事にて、左眼は明暗がボーとわかるだけで、モノを見る

## ともしび

煩惱深くして底無し 生死の海ほとり無し  
苦を度す船未だ立たずして 云何ぞ睡眠を楽しまんや

(往生禮讚)

「月花に四十九年の無駄歩き」の一句を残して江戸を去った一茶は、五十にしてそれまで争い合った異母弟との和解ができ、郷里で家を持ち妻を迎えて子宝にも恵まれたが、次々と子が夭折した時、

「苦の娑婆や花が開けばひらくとて」  
と詠じている。

藤村の詩に

悲しきかなや人の身の 無き慰めを尋ねわび  
道なき森に分け入りて など無き道を求むらん  
と嘆いているが、仏陀はこのように煩惱のためにはてしなく迷い苦しむ私共をかねてみそなわして、救いの願船を苦海に浮かべて、悲心切切と「来れ」とお喚びかけくださるのである。しかし私共は見はてぬ夢を追って性懲りもなく

ことは全然駄目になりました。目のすぐ前で手をひろげても手も見えねば、もちろん指も全然わかりません。失明とちがって明暗がボーと判るだけであります。

タノミの右眼は視力〇・一でしたが、それが二十四・五日前からグット見えなくなつたので、今年中には、たよりも書けなくなるのではないかと思っております。云々。

今回の八十日の入院中、胆ノウ炎でなるだけ動かないようにとのことであり、そのうえ持病の腰痛悪く、八十日上むいてねてばかりで「念仏詩」の書きかけもそのまま、結局、ただの一篇も書けませんでした。そのかわり、ありがたい／＼言いながら、忘れてばかりのお念仏様が、忘れた下から、かいくぐって、この濁悪の胸に、口にあらわされて下されて、お念仏ばかりの八十日でしたが、このお念仏一つ、ただ念仏でみたされて、お念仏はお声の親様であるときえいただかれます云々」

とありました。そうした中から次の念仏詩も送って下されるようにと祈念申しております。

念仏は親様なりき五月晴れ

無相

## 花田正夫

迷い続け、仏陀のみ声に耳を借そうとしないが、幸によき人に導かれて、苦海を渡る大船を知らされて光明の彼岸へ船旅がはじまるのである

(昭五七・九・四日)

闇の夜に鳴かぬ鳥の声きけば 生れぬさきの父ぞこひしき  
(古歌)

この歌は祖父が襖に張っていたので、いつの間にか心に刻まれている。その意味は誰も教えてくれず、また問いもしないで独りで禅家の考案のようにして心に保ってきた。

闇の夜とは、煩惱に覆われた暗い心と知れる。

鳴かぬ鳥の声とは、無明海に流転する私共に呼びかけられる仏の大悲の声で白隠禅師の提唱される隻手の声である。

それは微妙な声なき声で、私共には馬耳東風であるが、点滴が岩をもうがつように、たゆみなく注がれる仏の大悲によつて、そのまことが身にしみ、闇が破られる。



生れぬさきの父ぞ恋いしきとは、それに気付き得なかつた遠い昔から呼び続けて下さったと、その大恩を謝し、そのふところに喜び帰らされて、未だ穢身はそのままであるが、浄土のみ親が慕われてならぬのである。

(昭五七・一〇・二四日)

諸上善人、俱会一処

(阿弥陀経)

法然聖人が念仏法難の時、流滴の日、「たとえ膝をまじえ肩をならべていても、念仏のない人とは疎い」と云われた。古歌にも

恋しくば南無阿弥陀仏を称ふべし われも六字のうちにこそ住め

とある。念仏にもとづく情の通いは時と所を越えるたしかさがある。

さて子を亡くした母親から「子は何処へ行ったのでしよう」とよく聞かれるが、私は何時も「子の行方を探す前に、あなたの行く先は？、仏法をよく聞かれて、独生独死の人生、別離久長にして相遭うことの出来ぬ私共を一処に会せしめようための慈悲のお念仏を頂かされると、一切が自然に解決します」とお答えしている。

私自身父を亡くして仏法を聞くようになり、念仏申しな

がら父の暮前にお礼参りをした時、父も心から喜んでくれたと思ひ本當に有難かつた。

会うは別れのはじめといい、離れると疎んじ、遠ざかると忘れる世の鉄則を超えて、別れることのない世界のひらけることはまたとない喜びであり、これあつてか、離合も因縁にまかせることも出来るのである。

(昭五七・十二・二十六日)

廻向の転換―絶対の他力

他力ときくと、自力に対する相対的他力と簡単に考えられがちで、依頼心と誤解されやすいが、親鸞聖人は「他力というは如来の本願力なり」と特筆されている。

さて、従来、地球の周囲を太陽がまわつていと思われていた時、コペルニクスが、地球が太陽のまわりを廻つていると提唱し、これによつて天体のすべての運行が整然と知れた。

仏教で廻向も、善根を積んで仏にさしむけると一般に思われていた時、聖人は、如来が私共に御廻向下さるのであると、廻向の転換を身証せられた。ここに一切の善悪の凡夫が漏れなく往生成仏できる大道が明らかになったのである。

思うにこの起点は、我々の力では、如来にさしむける善根も功德も到底不可能であると知らされて、この虚仮不实の罪業深重の身は弥陀一仏がこれを憐れまれて、ここまでおいででなく、ここまで来て下さって手を執つて下さることを随喜されたのである。

(昭五八・二月二〇)

外形的融和と内面的融和

人種差別、階級差別などと、さまざまな差別問題がある。先ず何と云つても政治、経済、職業上の外的な差別はなくせねばならぬが、それだけでは不徹底である。ある貧民街を改築して立派にしたが、あい変わらず隣り近所との折合いがでさず、陸の孤島となった実例がある。

ここに差別の心の抜き難いことを慚愧して、そうした身をお隔てなく、いつでもどこでもお護り下さる仏の大悲心に帰して、和ぎの光をいたたく外はない。

インドの新仏教徒運動の提唱者アンデーパーカル博士は、自分が不可触賤民に生れ、度重なる圧迫と蔑視の嵐の中にあつて、仏陀のご真実心に慰められて、政治に学問になすべき仕事をなし遂げることが出来たと、声涙共にくだる告白を仏誕の記念祭典に発表し、多くの人々に深い感銘を与

えた、そこにこの運動が起つたのであつた。これこそわれらのよき大先達である。

(昭五八・五・一日)

信謗共に因となつて 同じく往生浄土の縁を成ず

(報恩講式)

これは親鸞聖人が門徒につねに語られた言葉である。世の常の教は、信ずる者は救われ、謗る者は退ぞけられるのに、かかる不思議なことを仰言つたのは、あだかも夜空に輝く月光が、そのまま太陽光線の照り返しであるように、聖人御自身が、かかる広大無辺な仏智の光をうけていられたからである。

しかもお言葉通り、疑うた明遍僧都も、謗りの張本人の山伏弁円も、信をとり情をひるがえしている。私も信ずる力もなく、あらゆる教を断念した時、幸にも聖人の教にあり、往生成仏の大道に導き入れられたのである。

嗚呼、信じ得ないで謗る者も、それが因(もと)となつて、皆同じ浄土に生れる縁と転じて下さるとは、文字通り稀有最勝の大法と称えまつるばかりである。

(昭五八・六・三日)



# あとがき

三伏の夏となりました。皆様の御無事を祈念申しております。

本月は近角先生の、内愚外賢と仰言った親鸞聖人の御真意を掲げさせていただきます。繰り返し御味読願います。

池山先生の、父と子は、仏と人と念仏の展開を、わかり易くお教え下さいました。

井上様は、無義為義について、如来の願力自然にたすけられる絶対他力の妙用を信味下さいました。古歌に、大いなる弥陀の誓にはからわれ、はからいつきてはからわれ行くとありますのも思い併せました。

西元様は御身辺におこりました。悲喜交々の出来事の中お念仏の所感とでも申されることを記していただきました。いつまでもお健勝なれかしと念じております。

一道会の記は例年ながら榊原様から頂いております。山田宰様と井上善右エ門様の感話を居ながらに聞かせてもらいました、御礼を申し上げます。

ともしびは中日新聞に出して下さったものであります。原稿用紙一枚のもので、判じ物のようになりました、御賢

察下さいますように、

私の宿痾も今のところ無事でありますので第三日曜の午後、一道会の例会を、お隣りの鬼頭様宅で開かせていただきます、御参会下さいますように。但し、中止の時は早速誌上でお知らせ申します。

定価	半 年 八〇〇円(送共)
編集・発行人	名古屋市南区駄上町 二ノ八八 花田正夫
印刷	愛知県西加茂郡三好町大字福谷 坂部光雄
発行所	名古屋六―一〇四七〇番 振替口座 郵便番号 四 五 七
発行者	慈光社